

ミステリ読書案内

2023. 3. 31 発行元

第462号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

土屋隆夫の代表作

戦後、日本の「本格ミステリ」の大きな柱になった土屋隆夫の代表作についてである。横溝正史、鮎川哲也、高木彬光ほどには世の中に知られていないかもしれないが、高レベルの作品を生み出した作家。

「日本らしさ」の本格ミステリ

土屋隆夫の私なりの「ベスト表」はこの『ミステリ読書案内』の第71号に掲載している。土屋隆夫は1949年から作家として活動を始めるのだが、短編が主で、最初の長編『天狗の面』が書かれたのは1958年になってからだった。

他の作家に比べるととにかく作品数が少ない。長編は14冊しかない。代表作を選ぶとすれば初期の3冊になる。『天狗の面』『天国は遠すぎる』『危険な童話』。この『危険な童話』が土屋ミステリの完成形で、その後の作品はレベルが落ちる。

土屋隆夫が描く世界は、私が子どもの頃に体験した風物であり、いかにも「日本的な情緒」を漂わせている。海外の本格ものの黄金期のミステリ形式を日本に合わせた形にしようと考え抜いた結果だと思う。

初期三作には共通して歌詞のようなものが登場してくる。ヴァン・ダインの『僧正殺人事件』のマザーグースのような雰囲気作りとして役立っている。そういう意味で土屋隆夫は海外ミステリの良さを十分に理解していた人だったと思う。トリックが仕掛けられた「本格もの」としての特徴と、地道に捜査を進める刑事の物語を楽しんでほしい。

NO.3「天国は遠すぎる」

1959年浪速書房。長編第二作に当たる。土屋が住んでいる長野を舞台にした作品。

久野刑事は非番の日に佐田部長刑事に呼び出される。法善町で若い娘の死体が発見された。自殺らしい。現場に行ってみると青酸カリによるものと判明する。枕元には遺書らしき封筒があり、駆け付けた父親が開けてみると、「死を誘う歌」として世の中をにぎわしている『天国は遠すぎる』という歌詞が書き写されていた。

この後、県の土木工事に絡む汚職容疑でマークされていた県の深見課長が失踪した後に絞殺死体で見つけられた。自殺したらしい娘の持ち物の中に料亭・富久野屋のマッチが出てきて関連が調べられていく。そしてボタンの謎など…。

NO.1「危険な童話」

1961年桃源社・書下ろし推理小説全集第二期七巻。第三長編に当たる。私の手元にあるのは1975年の角川文庫版。私が日本のミステリを読み始めた最初の頃に出会った名作のひとつ。江戸川乱歩作品は今一つ好きになれなかったけれど、土屋作品はすんなり読むことができた。

序章は「お星さまはあんなにたくさんお友だちがいるのに お月さまはいつもひとりぼっち」で始まる伊原道人の『月女抄』という作品紹介からスタート。これが第一章以降の章の冒頭に引き継がれる作りになっている。『危険な童話』の暗示。事件は木曾刑事の視点で描かれていく。長野刑務所から仮釈放になった須賀俊二という男が背中を刺されて死亡した。仮釈放の挨拶として訪れた従姉妹でピアノ教師の木崎江津子の家の居間で。江津子がい物に出たわずかの時間の間の出来事だったらしい。死体は右手にセルロイドの人形を握りしめていた。この後、江津子が容疑者として逮捕されるけれども、警察は凶器を発見することができない。そのうちに「江津子は犯人ではない」というハガキが警察に舞い込み、別の人物が疑われ始めるのだが…。その先はアリバイ崩しの要素が入ってくる。巻頭に出てきた『月女抄』との結びつきは…。

No.2「天狗の面」

1958年浪速書房。第一長編。私の手元にあるのは『別冊・幻影城No.4 土屋隆夫』。『天狗の面』と『天国は遠すぎる』が合本になっている。地方の伝承や風俗、そこに住む人達の考え方、気風などを生かした設定で、横溝正史の岡山シリーズと共通する雰囲気もある。

舞台は牛伏村。序章では牛伏村に赴任した土田巡査が村に入る道で不思議な男に出会う場面から始まっている。男は「天皇」と名乗り、ピント外れの言動を続ける。村から追いかけてきた妹の話によると戦時中にアカだと疑われて憲兵に連れていかれた後精神がまいってしまったらしい。第一章に登場するのが天狗様になった「おりん」という女性。母親に逃げられ、父親は宗教に没頭し、恵まれない育ち方をしたにもかかわらず、一人で地道に暮らしてきたおりん。ある時、いなくなった羊の居場所を予言したことなどから、天狗様としての祭られるようになったらしい。病気も治すとか。折しも牛伏村は隣の横手町と合併の話が持ち上がり、反対派の村議・池内市助がおりんのお祈りの最中に亡くなる事件が起きた。天狗の面をつけたおりんの足元に倒れた死体。農薬による毒殺らしい。この後、村では連続して殺人が…。果たして結末はいかに…。